

第三十五回 葉桜短歌賞

受賞者名簿及び作品

選評 歌人 伊藤一彦

美郷町

葉桜顕彰会

美郷文芸の会

第三十五回 葉桜短歌賞応募者数

◇ 一般の部

内訳 県内

五十名 一四八首

県外

一四四名 四二八首

◇ 小学生の部（日向東臼杵他）

三二八名 三二八首

◇ 中学生の部（日向東臼杵他）

三八三名 三八三首

◇ 高校生の部（県内）

二二六名 二二六首

計 一五二三首

※優秀賞・佳作の配列は受付順

第三十五回 葉桜短歌賞 入賞作品

《一般の部》

【最優秀賞】

不機嫌な背中を見せる子を叱る言葉に親の驕りは匂う

でも、だって、繰り返すとき子の中に蠢いている私の欠片

知らん顔しながらそつと手を添える子のネジ山を潰さぬように

宮崎県新富町 門田祥子

【優秀賞】

母親に抱かれた稚児の安らかな笑顔ただ戴くバス待ちの列
補助席に戸惑いおればさりげなく手助けくれる後ろ席から

宮崎県日向市 池田慶子

母作る男爵薯はそれぞれに表情ありてなぜか哀しき
真裸で蛇と泳ぎしふるさとの川も景色も開発に消ゆ

群馬県伊勢崎市 川野忠夫

さよならを告げし少女の風情して咲くスズランの俯きかげん
渡りへと飛び立つ鳥と飛べぬ鳥刹那に交はす羨望やある

兵庫県神戸市 山本みさよ

かわいいとささやく君にかけられし魔法はとけず四十回めの夏
えいやつと夫婦になりぬいさかいの夜もまたよし雪をとかして

宮崎県宮崎市 南ゆき

逃げ切ったはずがコンマ一秒で敗れたりけり引退決まる

泣ける児と泣けない吾子おり泣いた児に拍手を送る人のおりたり

宮崎県宮崎市 山田 幸子

【佳作】

姉の事知りたる人らの消えてゆく姉のすべてが消えるごとくに

宮崎県日南市 宮田 隆雄

再会の息子の選ぶひつまぶしうまいうなぎを親子で食す

宮崎県日向市 黒木 直行

山々を動かすような音たてて花火はあがる田代の里に

宮崎県日向市 黒木 金喜

「花好きの爺が棲んでる家ですよ」われを教える団地の人は

徳島県阿南市 小畑 定弘

孤悲と書くこの感情をあなたなら蒲公英のわたに託したでしょう

広島県広島市 岩本 幸久

ゆうがほの白き花かげに風落ちていづこより来るこの寂しさは

青森県八戸市 木立 徹

屋根の雪どさりと落ちる重き音ビルより身投げの遺体のように

青森県八戸市 小野 一男

正直な君の瞳が聞いているわれの言葉をわれより深く

宮崎県都農町 税田 敏昭

海牛の水槽まるでファッションショウ離れぬ私は地味目の女

宮崎県綾町 鈴木 みち子

酒蔵に住む菌は「このこたち」杜氏語りぬ小さな神を

新潟県燕市 七里 松枝

ファイナーレの花火に向かい数千の携帯画面いつせいに咲く

千葉県市川市 山本 明

簡便さ求める世にて問いかける手間暇かけた山栗おはぎ

熊本県熊本市 篠原 由美子

宿題、作文むかし教えし弟がいま投資のコツを吾に説いており

東京都品川区 徳永 多恵子

トロ箱におひてけぼりの鯛一尾近づき見れば袂り傷あり

宮崎県串間市 坂本 不二子

アジフライは夕餉のために 人はみな誰かを思い家路を急ぐ

大阪府堺市 山内 弘 絵

満月の海面に染まる幻想のゆらめく帯の三世の輝

宮崎県串間市 安山 らく

組みし手にわずかに残るぬくもりに思い出したる母のやさしさ

宮崎県美郷町 鎌田 次郎

初夏とともに過せし黄揚羽のこの手離せば二度とまみえず

山口県下関市 佐藤 浩子

いく度も遺影の写真とり代えて九十五才の写真飾れり

千葉県茂原市 旭 千代

流離なく米寿となりて恙なし令和も五たび蟬の声聴く

宮崎県綾町 柿内 芳子

《小学生の部》

【最優秀賞】

たのしみは夏の終わりに近づいて木の葉の色がにじになる時

美郷町立美郷北義務教育学校六年 平尾 総 将

【優秀賞】

このきにもせみのぬけがらについているなつのそらへとたびにでたのか

日向市立東郷学園一年 中村 雅

プールしてはじめてういてうれしいな空にひこうき一きみつけた

日向市立坪谷小学校二年 平井 杏 門

ちんぱんじいちかくでみるとつよそうだゆびがふとくてきんにくもりもり

美郷町立美郷北義務教育学校一年 矢部 ルーナ

【佳作】

東郷の夜空に上がる夏の花次に出る色予そうしてみる

日向市立東郷学園三年

山本 奈々

夏休み大雨けいほう外のぞきわくわくしてた大人ハラハラ

日向市立東郷学園四年

福山 月奏

さあいこうやたいたくさんどこいこう氷ごりごりわたあめふわふわ

美郷町立西郷義務教育学校三年

中武 千南

お兄ちゃんがさんぱつしたら大へんしんよこだけ切って大わらいした

日向市立寺迫小学校三年

小林 恢晶

アマガエルレモングラスで雨やどりぼくは待つてるケロケロ言うの

日向市立寺迫小学校五年

辻本 爽祐

まっかつかボールみたいなたマトだよはやくたべたいママとたべたい

美郷町立美郷北義務教育学校二年 志摩 凜太郎

《中学生の部》

【最優秀賞】

バーベキュー家族十人集まったそれぞれが持つ真夏の匂い

小林市立紙屋中学校二年

白尾 弥和

【優秀賞】

ラケットの素振り続けて100万回勝利への一歩努力の証

高原町立高原中学校二年

野元 美鈴

応援団誰に借りよう学ランを実は決めてる君にかりたい

小林市立野尻中学校二年

梶田 野々香

夏の夜ふと静まると遠くからてんてんと踊る音たち

日向市立日向中学校三年

川崎 祐斗

【佳作】

釣りに行き兄弟話す何釣れた僕は0匹僕も0匹

日向市立東郷学園八年

稲田 勇馬

盆踊り兄の太鼓で唄う祖父みんなで踊るやつとできたね

美郷町立西郷義務教育学校七年

蒲生 翼

勢いで踏み出して飛ぶ走り幅口に感じた砂粒の味

小林市立野尻中学校一年

岩崎 日向

流れ出す汗と涙とあふれ出す闘志と感謝この白球に

小林市立野尻中学校一年

村上 怜杏

一つ上勝利するため頑張ったすべてをささげた熱いアオハル

小林市立野尻中学校一年

山本 莉樺

こつそりと制服姿で待ち合わせ初めて出会った運命の人

小林市立野尻中学校一年

渡 琉雅

《高校生の部》

【最優秀賞】

ひまわりの花咲くような明るさであなたは話す他の誰かと

宮崎県立小林高等学校一年 川崎 琉愛

【優秀賞】

教えてよ俯く君をとびきりの笑顔にできる魔法の言葉

宮崎県立佐土原高等学校一年 立山 仁美子

水しぶき手から離れる輝きを見たか大人よこれが自由だ

宮崎県立富島高等学校二年 中森 舞希

君のため伸ばした髪を切ってみる明日はいい日になりますように

宮崎県立小林高等学校二年 杉元 佑成

【佳作】

川流れ思いも流れ一人旅水面に映る私がゆれる

小林西高等学校三年

甲斐夏姫

いつもよりおめかししてのお出かけです彼をいとめる今日の私

宮崎県立富島高等学校二年

岩淵美瑚

何したの何を食べたの今日のこと全部知りたいリアコのわたし

宮崎県立富島高等学校二年

志田幸花

通学路見飽きた道よこの町よ外に出たいよ刺激がほしいよ

宮崎県立小林高等学校二年

平松陸

うどん屋で初めて食べたかしわ飯知らない母の思い出に触れた

宮崎県立小林高等学校二年

楠元梨央奈

体のため毎日歩く祖母のわけ私とともに旅をしたいから

宮崎県立宮崎東高等学校三年

奥村茉麻

《第十七回 藤田世津子 賞》

幾十年魚屋支えきし嫗鯉の湯引きが食べたいと言う

大阪府河内長野市

西本照代

第三十五回 葉桜短歌賞選評

選者 伊藤一彦

《一般の部》

不機嫌な背中を見せる子を叱る言葉に親の驕りは
匂う

宮崎県を代表する短歌賞の一つとして発展してきた「小野葉桜賞」は、今年も県内外からたくさんの応募作品が寄せられました。この賞の特色は三首連作で

でも、だって、繰り返すとき子の中に蠢いている
私の欠片

応募することです。読みごたえがありました。選考は完全に無記名の原稿で行いました。（選考が終わった後に入賞者の名簿を見たら、県内の人が多く選ばれていました。久しぶりでした）

知らん顔しながらそつと手を添える子のネジ山
を潰さぬように

以下、入賞作品の一部について評を述べます。詳しくは当日の会場で述べます。

最優秀賞の作品です。親と子の関係をテーマにした三首ですが、鋭さと深さが強く印象に残りました。

一首目と二首目の下の句に注目して下さい。「親の驕りは匂う」「蠢いている私の欠片」。思春期を迎えた子と親の愛情が見事に歌われています。そして、さりげ

かわいいとささやく君にかけられし魔法はとけず

四十回めの夏

泣ける児と泣けない吾子おり泣いた児に拍手を送る人のおりたり

一首目、場面を具体的にしつかり描いています。特に結句。すばらしいのは四句「笑顔戴く」です。二首目、

す。「なぜか」もこの場合はいいです。三首目、飛び立つ鳥と飛べぬ鳥の関係を歌っていますが、これは単な

「魔法」の語が面白いですね。仲睦まじい夫婦の歌で、読者も楽しくなります。五首目、「泣けない吾子」をい

とおしく思い愛する母親の歌です。母親も小女時代は
そうだったのかもしれないね。

佳作の歌も充実していてよかったです。

《小学生の部》

最優秀賞・優秀賞の四首です。

たのしみは夏の終わりに近づいて木の葉の色がに
じになる時

このきにもせみのぬけがらついているなつのそら
へとたびにでたのか

プールしてはじめてういてうれしいな空にひこう
き一きみつけた

ちんぱんじいちかくでみるとつよそうだゆびがふ
とくてきんにくもりもり

木の葉の色にしても、せみのぬけがらにしても、し
っかり見つめて自分の想像をゆたかに広げていると
ころがすばらしいですね。

《中学生の部》

バーベキュー家族十人集まったそれぞれが持つ真
夏の匂い

ラケットの素振り続けて100万回勝利への一歩
努力の証

応援団誰に借りよう学ランを実は決めてる君にか
りたい

教えてよ俯く君をとびきりの笑顔にできる魔法の
言葉

夏の夜ふと静まると遠くからてくてんと踊る
音たち

水しぶき手から離れる輝きを見たか大人よこれが
自由だ

中学生になると題材がさすが広がりますね。家族を
見つめても鋭いし、部活や応援団、地域の集まりなど
しつかり捉えています。

君のため伸ばした髪を切ってみる明日はいい日に
なりますように

《高校生の部》

高校生はやはり恋の歌ですね。恋する喜びと苦しさ。
青春そのもので、感動します。

ひまわりの花咲くような明るさであなたは話す他
の誰かと

《藤田世津子賞》

幾十年魚屋支えきし姫鱧の湯引きが食べたいと言
う

この姫と作者との関係はわかりませんが、魚屋を幾
十年もがんばってきたこの女性への愛情と尊敬が感
じられる作です。作者は余分の感想を言っていないの
がいいです。姫の言葉だけを引いているのが作品の成
功の秘訣です。

小野 葉 桜 歌 集 「悲しき矛盾」

- 一 落日の海鏡あしごとき岩の鮮やかに望遠鏡にうつる悲しさ
- 二 崎の岩赤黒く鏡あて疲れにし落陽の海にたつ漁もなし
- 三 貴に驢みて海より月の出でければ誰いふとなく浜に走れり
- 四 どどと狂ひて岩窟に浪はまきかへるかゝあれかくあれこころおびえず
- 五 兎入れぬためと聞くより野の中の畑の垣を壊してやりぬ
- 六 森に入ればまた森に来て鳥啼く首でも吊ると思へるならむ
- 七 汐さびし釘あと黒き大船の破片に歌は彫るべかりけれ
- 八 弱くもへららへららと藝笑ふ藝を味方にせむと思へり
- 九 ごぼごぼと蹴りがひもなき藝の面醜くもまたかわゆきは藝
- 一〇 山の蝶の毛ぶかきが鼻先をおびやかす歪めし顔をまたも脅かす
- 一一 人をのをのかくれたる罪ありと信じ自棄の心を慰めて居る
- 一二 本の上の蚤を抑ゆれば悲しくも汚なき指紋が印さるるなり
- 一三 網を曳く漁夫にまじりてひいて居れば白き腕の腹立たしくなりぬ
- 一四 噓う石よといひて見たくなり大いなる石を櫛でにけり孤独のさびしさ
- 一五 怖ろしき昏らさなりけり電燈より大篝火焚き生命まもらむ
- 一六 踊り疲れて白粉の顔をふいて居る若き田舎の女のいとしさ

- 一七 頬髭をたくはへて顔のさびしさをかくさむとするやるせなきこころ
- 一八 秋来れど秋がかなしくなれり悲しきことは四時につづく
- 一九 こころふたたび狂ひいでよかし孤独は蛇の眼のごとくさびし
- 二〇 親はありはからはあれどいつしかにこの身孤りになりゐたりけり
- 二一 人の児に叩かれつつも泣いて居る児を打擲すその親の前にて
- 二二 苛らいらと泣いて居る児が憎くなりかたへを向きて真吸ひ居り
- 二三 人の児の悪しきにさへもをのが児を吐りてよわき性となししかな
- 二四 父といへばこの父の教へさへ柔順に守る児のいとほしさ
- 二五 父に似し我が子の顔をかなしくも打守り居れば泣き出しにけり
- 二六 十日ほど晩酌をやめてかずかずの玩具を買うてやらむと思へり
- 二七 這ひ寄れば胸にだきしめかはゆがる吾子にさへこころうちあけむとす
- 二八 見すばらしき姿さびしみ児らの前に泣きもえやらず物教へ居り
- 二九 小鳥飼ふさへいまはうとまし妻も子もこの鳥のごと放ちやらむか
- 三〇 冷笑の中の矛盾のおもしろさ身をめぐり泣く母と妻と児とあり
- 三一 お前らがゐるがむ墓はこゝにないとおのが児にいふ妻の郷かな
- 三二 父上の子の百姓にかへらなむ垂り穂の秋のここのふる郷
- 三三 あはれ火山灰ふる四方の国原わかず降るかかる日こそは父母恋し
- 三四 よそ國のごとくなつかし夜をこめてふるさとの野は燃ゆるなりけり

若山牧水と小野葉桜の交友略年譜（伊藤一彦編）

明治二年（一八七九）六月、小野葉桜、西郷村大字田代小川に生まれる。本名岩治。

明治八年（一八八五）八月、若山牧水、東郷町坪谷に生まれる。本名繁。

明治三年（一八九〇）牧水、父の医師立蔵が西郷村に招かれ、一家と共に西郷村田代小川に移る。

明治四年（一八九一）葉桜、田代尋常小学校卒業。延岡へ遊学。

明治五年（一八九二）牧水、田代尋常小学校に入学。しかし、秋には坪谷に帰り坪谷尋常小学校に転校。

明治九年（一八九六）牧水、坪谷尋常小学校卒業。延岡高等小学校に入学。

明治三年（一八九九）牧水、延岡中学校第一回生として入学。このころ、葉桜は美々津小学校や田代小学校で教師。

明治五年（一九〇二）一〇月、葉桜より牧水へ初めての手紙。二月、二人が美々津で会い、以後交遊が深まってゆく。

明治六年（一九〇三）四月、牧水が中心になって作った短歌研究会「野虹会」に葉桜も参加。

明治七年（一九〇四）一月、葉桜、勉強のため上京。四月、牧水は早稲田大学入学のため上京。牧水の世話を葉桜が行う。五月、葉桜に召集令状、東京。

明治八年（一九〇五）葉桜、戦争が終わり帰郷し、美々津の医院で薬局を三伝う。大森ナミエと結婚。

明治九年（一九〇六）葉桜、西郷村役場前で薬店を開き、また峰青年会を発足させるなど社会教育に尽力。

明治四〇年（一九〇七）

牧水、大学四年生。東京に永住し、文学者になることを決心。一方、園田小枝子との恋愛が熱烈に進行。葉桜、二八歳の若さで東臼杵郡会議員となる。しかし、人力車事故で強く頭を打ち病を得て一年余りで辞任。

明治四一年（一九〇八）

牧水、早稲田大学を卒業。七月、第一歌集『海の声』出版。

明治四三年（一九一〇）

牧水、一月に第二歌集『独り歌へる』出版。三月、詩歌雑誌『創作』発刊。四月、第三歌集『別離』を出版して、好評を博し注目歌人となる。葉桜、美々津に転居。妻ナミエが小学校教師。

明治四四年（一九一一）

牧水、小枝子との恋愛が破綻。九月、第四歌集『路上』出版。

葉桜、『時事新報』新春文芸心算歌集第一席。

明治四五年（一九一二）

牧水、五月に太田喜志子と結婚。七月、父の病のため坪谷に帰郷。九月、第五歌集『死か芸術か』出版。そのころ、美々津役場に勤めていた葉桜と牧水との熱い文学的交遊が再び始まる。

大正二年（一九一三）

牧水、五月に出郷し東京へ。九月、第六歌集『みなかみ』出版

葉桜は牧水が東京で復刊した第二期『創作』に作品発表。

大正三年（一九一四）

葉桜、三月の職場の晩食会の席上で突然怒罵声を発し退席。病

氣再発。作歌が不可能となった。

大正九年（一九二〇）

牧水一家、東京から沼津に転居。

大正一一年（一九二二）

葉桜の妻ナミエ、子供らを伴い上京。

昭和三年（一九二六）

牧水、九月一七日に沼津の自宅で水眠。享年四三歳。

昭和一七年（一九四二）

葉桜、一〇月九日に西郷村の弟宅で水眠。享年六三歳。